異界の魔術士 5

ヘロー天気

Hero Tennki

Regina

RB

レジーナ文庫

Main Characters
登場人物紹介
レティレスティア
『精霊の国』と名高いフレグンス王国の王女。優れた精霊術士。16歳。
ヨールテス
キトの元最高指導者にして魔族組織の長。
キルト
ヨールテスの従者。
ルティレイフィア
レティレスティアの妹。姫ながら優秀な剣士で、よくお忍びで諸国放浪の旅に出る。
ブラット
『銀月の牙』という傭兵団を率いる傭兵団長。冷静沈着で寡黙な男。
ブレブラバンド
未開地アーサリム一帯の多数の部族を纏める若き大族長。
バルティア
昨今傀儡より脱却したグラントゥルモス帝国皇帝。朔耶をこよなく愛する24歳。
都築朔耶
異世界で「発明家魔術士」となった女子高生。機械弄りと武道と人をのせる演技が得意な18歳。

目次

異界の魔術士5 7
番外編　誇りと忠誠 317
～フエルト・バルト・コースティンの邂逅(かいこう)～
書き下ろし番外編　紅獅子(べにしし)の憂鬱(ゆううつ) 359

異界の魔術士 5

序章

商人国家キトの中央通り広場。

キトの政府組織と思しき屋敷を制圧した、グラントゥルモス帝国、フレグンス、ティルファの三国同盟は、各自帰還のため出発準備を整えている最中である。周囲にチラホラと野次馬が見える中、竜籠の前で言葉を交わす朔耶とフレグンス辺境騎士団中隊長のアンバッス。

「アンバッスさんはしばらくキトに残るの？」

「ああ、正式に街を統治する者が決まるまで駐留する事になる」

屋敷とそこから繋がる地下施設、街中に点在する政府関連施設も大体の調査を終えた。キトの街には、以後フレグンス騎士団と帝国密偵部隊、それにティルファ魔術団が残って当面の統治を行う。

帝国皇帝バルティアは、政務のほとんどを秘書アネットと側近のダンクルに任せてきたので早く戻らねばならず、精鋭騎士団と共にキトを発った。

ティルファ中央研究塔所長ブラハミルトも、地下施設で発見された書類により、自国の中枢にいる人物が魔族と繋がっている事が発覚したため、その調査をすべく既に帰国の途についている。

フレグンス王国派遣騎士団に所属するガリウス小隊長の部隊は、アンバッスの指揮下に入って居残り。精霊神殿所属のフューリ達聖騎士団は、ガリウスの部隊が乗ってきた竜籠で一旦フレグンスの衛星国家サムズ国のエバンスに移動して、一日休んだのち王都フレグンスへ。

朔耶はアンバッス達と乗ってきた竜籠で宮廷魔術士長のレイス、その補佐官フレイと共に王都まで直行便で帰る事になる。

これは今回の作戦で長距離を飛んで来た竜達の体力を考えての振り分けだった。十人以上の大所帯かつ完全装備の聖騎士団員達を運ぶのに比べて、軽装の朔耶達三人なら速度も出せるという訳だ。

竜の体力は朔耶の精霊の癒しで回復させる事も可能だが、あまり無理はさせない方が良いと判断された。

キトから王都フレグンスまでは約九時間、到着は深夜になる見通しだ。竜籠の操舵を

レイスに任せ、朔耶とフレイは籠の隅で丸くなって仮眠を取る。

「うーん、フレイの身体あったかい……」

「サクヤ様……」

帰国の道中、レイスはそんな二人に微笑ましさを懐くべきか嫉妬を懐くべきか、少し悩んだ。

「なんとも悩ましいですね」

「キュ」

レイスの呟きに竜が答えた。

第一章　アーサリムの傭兵騎士団

フレグンスに到着したのは深夜。朔耶の腕時計は二時過ぎを示している。二人を起こしたレイスは、とりあえず城の客間で休むよう促すと、報告書を纏めに自分の執務室へ急ぐ。

キトの地下施設で見つかった書類からは、キトの最高指導者がサムズの動乱の折に暗

躍していたヨールテスだった事や、彼が魔族であった事なども明らかになった。さらには彼が率いる魔族組織の本拠地が未開地アーサリム地方にあり、そこには希少な精霊石の鉱山がある事なども記されていた。

その他にも、キトが各国に忍び込ませている密偵の情報や、協力関係にあった有力貴族の名簿など重要な証拠が見つかっている。

今回の事はキトへの今後の対応や、協力者達への処断も含めて、素早い政治的判断が求められる。特に精霊石鉱山については、他の二国も採掘権を欲して動き出す事が予測されるため、出来る限り迅速な調査が必要だ。

レイスはこの度得られた情報をもとに、キト政府の実態と魔族組織との関係、国内に潜むキトの密偵や、彼の国の息が掛かった有力貴族の存在、アーサリムへの調査部隊派遣案と、三つの要点を押さえた報告書を作成。そこで疲労も限界に達し、執務室のソファーで仮眠を取るのだった。

早朝――

王の間ではカイゼル王、アルサレナ王妃、レティレスティア第一王女の他、宰相をはじめとする側近官僚数人が集まり、難しい顔でレイス宮廷魔術士長の報告書を前に唸っ

たり囁き合ったりしている。

この場には朔耶とフレイ、イーリス近衛騎士団長も同席していた。ちなみに皆に配られた報告書は、朔耶が地球世界でコピーしてきたモノだ。出席者はやたら手触りの良い上質な紙にも興味を惹かれるところだったが、そこに書かれた内容はそれ以上に衝撃的なモノであった。

今後のキトについては、三国共同で統治する事で話が纏まっている。実務者については、キトを統治していたのは魔族組織という実態を知らなかった者も多かったため、ほぼそのまま留任させる事が決まった。それにより三国共にキトの商人達とはこれまで通り円滑な取り引きが行われると推測されている。

そして未開地を本拠地とする件の魔族組織についてだが、これは三国共通の敵性脅威勢力と見做して対処する。また、見つかった名簿をもとに、各国上層部に潜む魔族組織と関わりのある人物の処分も行い、早急な浄化と人事の再編を進める予定だ。

ちなみに、キトの政府施設の厨房で見つかった限定販売用の魔力石コンロは、名簿にあったような上層部の貴族達ではなく、中層から下層に属する、いわゆる弱小貴族達に売られたモノである。その事から、魔族組織と直接関わりがある大貴族の配下か、その派閥に属する末端の貴族などから献上されるなり、巻き上げられるなりしたモノではないかと判断されていた。

最優先案件である未開地アーサリムの鉱山については、フレグンス領に組み込む方向で検討中だ。そのためには何よりもまず現地の情報が求められる。

それらの情報収集においても、第二王女ルティレイフィアが現地で人道的活動、魔物退治や集落防衛などを行い、人望を集めているため、他の二国より多少有利に事を運べるだろうと期待されている。

「あの子は複雑な顔をするでしょうけどね」

アルサレナの言葉には、母親としての気持ちと王妃としての責任が入り混じっていた。

大陸南東部に広がる未開地は、大陸のほぼ中央から北東全域を領地とするフレグンス、南のサムズ、その中間に位置するクリューゲルに半ば囲まれる形になっている。一方大陸北西部を支配する帝国は、間にティルファやキトなども挟むため最も遠い。アーサリム攻略にあたって地理的にはフレグンスが有利だが、帝国には竜籠がある。安定した資金源を欲する帝国は、たとえ飛び地になっても領土に組み込みたいところだろう。

これから三国で取り分の交渉に入る事になるが、朔耶の存在があるので帝国とティルファの二国はフレグンスに遠慮せざるを得ない。

今回の件で最も重要な働きをしたという事実も然ることながら、その並外れた力を見せつけた事で十分な抑止力となっているのだ。朔耶本人にその気があるかどうかはともかくとしてだが。

ティルファはキト制圧の協力への見返りとしてだけでなく、自国への研究支援という名目でも精霊石の三国共同採掘を提案してくると予想される。そうでなくとも何らかの形で採掘権の要求はあるだろう。

帝国とは交渉前に、鉱山を自国領に組み込むための工作合戦も起こり得る。その上軍事力に長けた帝国の場合、直接アーサリムに攻め込む事で鉱山を手に入れる可能性さえあるのだ。竜籠の持つ輸送力はやはり大きい。

「ここは先に交渉の席を設けて牽制しておく方が良いかもしれませぬな」

「協力して採掘するなら運搬方法や採掘技術も考慮して、取り分は4：4：2というところか」

フレグンスが4、帝国が4、ティルファが2という割合である。利益を計算し経済効果を謳うカイゼル王や側近達に、それまで黙って聞いていた朔耶が一言呟く。

「〝取らぬ狸の皮算用〟ね」

「サクヤ様？」

朔耶の呟きの意味が分からず小首を傾げるフレイ。朔耶はこの異世界で『狸』に当たる動物が分からなかったので、『取らぬ獲物の皮算用』と言い換えて説明する。

「手に入るかどうかも分からないモノを当てにして計画を立てる事の喩えだよ」

相変わらず的確で洗練された『サクヤ』の国の賢者の言葉に、感嘆しつつもばつが悪そうなカイゼル王と側近達。珍しくアルサレナも自省するような表情を浮かべると、ぽや〜っとした雰囲気で鎮座している娘に目をやる。

「本当に、娘とは大違いですね」

「母様……ひどいです」

思わぬとばっちりを受けたレティレスティアが拗ねた。

会議は、他二国と情報交換をしつつ連携し、ルティレイフィアとも連絡を取って未開地の情報を集めるところから始めよう、という事で一応の結論を見た。そう遠くない内に、未開地へ向けての部隊派遣が発表されるだろう。

王の間を出て官僚達の執務室が並ぶ廊下を歩きながら、朔耶は隣を歩くレイスに話しかける。

「レイスはまだこれから仕事？」

「ええ、人事処分の書類を纏めなくてはいけませんから」
「あー……そっか」
「あの、レイスさま」
ふいにフレイが湯浴みに行って来たいと申し出る。それを聞いた朔耶も、昨夜はお風呂に入っていなかった事を思い出した。せっかくなので自分の屋敷のお風呂に入ろうとフレイを誘う。レイスも、書類作成は一人で出来るので、今日は昼からの出勤で構わないと許可を出した。
「よーし、それじゃあお風呂入りに行こー！　シャンプーとかも置いてあるからね」
「それはサクヤ様の国の湯浴み道具でしたね」
「うん、なんかコッチの男共は石鹸とかシャンプーの匂いとかに弱いっぽいから、レイスもメロメロになっちゃうかもよ」
「えっ！　そ、そう……なんですか？」
さっと頬を染めるフレイがちらりとレイスの様子を窺う。朔耶もニヤリとレイスの様子を窺う。レイスは溜め息を吐きながら、執務室に籠もる前に食堂で食事をとっておこうと決めるのだった。

「お帰りなさいませ、サクヤ様。ようこそいらっしゃいました、フィレイヤ様」
フレイを連れて王都の開放区に立つ自分の屋敷にやって来た朔耶は、早速お風呂と食事の準備を頼んだ。屋敷の主たる朔耶が初めて訪れて以来、実に二十二日ぶりの帰宅と初来客に、使用人達も張り切って出迎えた。
軽く食事を済ませた後、朔耶とフレイは湯が張られたお風呂場にやって来た。プチ銭湯と言えるほどの広さを設けた日本式のお風呂場で、浴槽も腰まで浸かれるよう深い造りにしている。
「空気がちょっと冷たいかな」
「温めましょうか？」
広さゆえにお風呂場はやや肌寒かったが、フレイが攻撃魔術の形になる前段階で発現させた火属性の魔術によって、室内の空気は快適な温度まで上昇する。
「便利だねーそれ」
「ふふ、乾燥にも使えるんですよ」
フレイの魔術に感心する朔耶に対し、フレイはといえば地球世界から持ち込まれた湯椅子や洗面器に感嘆し、身体を洗うスポンジの手触りにも驚いていた。
「凄いですねー……サクヤ様の美しい肌や髪の秘訣がここに！」

「いやいや、そんな大層なもんじゃないけど……それよかフレイの方が凄いというか」
朔耶は『フレイは脱ぐと凄かった』という感想をまず持った。
以前にもバーリッカムの温泉や『夢内異世界旅行』で見た事はあったのだが、温泉では皆薄い湯浴み着を纏うし、夢の中で見る時はシチュエーションが過激すぎてすぐに退散するので、ここまでハッキリくっきり目にするのは初めてだ。
とりあえず朔耶は、フレイにシャンプーの使い方を教えたり、ボディソープを付けたスポンジで洗いっこするなどして、しばしゆったりと入浴を楽しむ。
「ふう……湯浴み着も無しでお湯に浸かるなんて、不思議な感じですね」
「あたしのトコじゃこれが普通なんだけどねー。……それにしても」
広い浴槽の縁に背を預けながら、手足を伸ばしてお湯に浸かる心地好さを満喫していた朔耶は、改めてフレイの豊満なバストに目をやる。
「でかい」
「え？」
朔耶はおもむろに、むにむにと揉み上げた。
「ふーむ……レイスはこれを毎日好きにしてるのか」
「えっ？　えっ？　ええ～っ!?」

むにむにむにむに
「フレイって確か、あたしと一つしか歳違わなかったよね……クラスにもこのサイズの子は居なかったよなぁ」
「あ、あ、あの……っ、さ、サクヤ様……っ……んんっ」
湯にノボせたのとは明らかに違う理由で身体を紅潮させていくフレイ。朔耶は『何故これで型崩れしないのか』とか『この張りは外国人補正か』とか呟きながら、心地好い柔らかさと重み、そして温かさを愉しんでいたのだが――
サクヤヨ
『ん？　なーに？』
スゥイッチ　トヤラガ　ハイッタノデハ　ナイカ？
『スイッチ？』
神社の精霊からの指摘に小首を傾げた朔耶は、ふいに視線を感じて顔を上げる。フレイが熱い吐息混じりの浅い息遣いをしながら、潤んだ瞳でじぃっと見つめていた。なんだか目つきが危ない。
フラグガ　タッテオルゾ
『……もっと早く教えてね』

昨今少しずつ覚え始めた横文字と、少しずつ覚えてしまった兄語（重雄）（？）で警告を発する神社の精霊に、朔耶は抗議する。

「……サクヤさま」

「ちょっとまった！　ストップ、ストップ！」

ずずいっとにじり寄って来るフレイを押し止めようとした朔耶は、うっかりその豊満な胸を押し上げて余計に相手を刺激してしまう。フレイは朔耶の手を取ると、そっと握って愛しそうに指に舌を這わせ始めた。

「ぎゃーーっ、指舐めとかエロ過ぎる！」

「んん……はぁ……サクヤさまぁ」

これはイカンと焦った朔耶は、風呂場の隅にある水桶に意識の糸を伸ばす。そして水を操り、フレイの顔を目がけて浴びせかけた。

「精霊ビーム！」

「ひゃんっ！」

文字通り『冷や水』を浴びせられたフレイは、しばしキョトンとしていたが、やがて見る見る顔を紅潮させると、湯船から飛び出そうとした。

今この状態で逃亡されたら後で顔を合わせる時の恥ずかしさたるやいかばかりかと、

咄嗟に腕を掴んで引きとめる朔耶。

「は、放して下さい！」

「待ってってば、落ち着いてフレイ」

「後生ですから！　後生ですから！」

「恥ずかしいのはあたしも一緒だってばっ、そもそもの原因はあたしなんだから！」

二人して真っ赤になりながらお風呂場で騒ぐことしばし。ようやくフレイが落ち着いた頃には二人揃って湯冷めをしていたので、もう一度温まり直してからお風呂を出た。

「フレイをそんな身体にしたレイスが悪い！」

「さ、サクヤ様……それは」

そう力説してレイスに責任を擦り付ける朔耶と、戸惑うフレイ。

結局今日の事は二人だけの秘密という事で収め、それにはフレイも同意した。

アルジドノハ　ソノキニナレバ　ダンジョコンゴウノ　ハアレムデモ　ツクレソウデアルナ

『いらないわよ、んなハイブリッドハーレム』

お風呂上りのお茶など口にしながら、神社の精霊の冷やかしに突っ込む朔耶なのであった。

オルドリア大陸南東部、未開地とも呼ばれるアーサリム地方。
その入り口の街『ササ』は、この地方で唯一街道によって他国と繋がる街である。そして中小規模の部族が多数乱立するアーサリムにおいて唯一の中立地帯でもあり、最も強い勢力を誇る部族の族長が周辺の部族戦士を率いて治めていた。彼等は絶対的な中立を謳い、いかなる勢力にも肩入れしない。
さらに街中では一切の諍いが禁じられている。たとえ人狩りによって他の街から奴隷が攫われてこようと関知せず、それを取り返そうと動く者にも、相手との話し合いによる解決以外は認めない。
未開地の奥から度々奴隷商人を追ってこの街まで来るルティレイフィアも、ここでは直接的な手出しが出来ないので、情報収集や傭兵の手配のみに止めている。
その代わり街を出た商人の馬車がフレグンス領を通る場合は、積荷を検査して攫われた者を見つけ出し、救出していた。が、そんな風に攫われた人々を取り戻せた例は多くない。

形の崩れかけた石造りの建物に、看板が括りつけられた古い酒場。見てくれは今にも潰れんばかりだが造りはしっかりしており、壁の厚みなどちょっとした砦並はある。客足も多い。
この馴染みの酒場に立ち寄ったルティレイフィアは、店に入るなり少し奥まった位置のテーブルに着く大男から声をかけられる。
「また揉め事を起こしに来たのか？」
「ふっ、今日は兵を募りに来ただけだ」
勇ましい部族衣装を纏う大男にそう返すと、ルティレイフィアはカウンターの席に着いた。もそっとした髭の店主にいつもの地酒を注文して銅貨を置くと、すぐに椀型のカップが出て来た。それに口を付けながら店主と話をする。
「使えそうな傭兵はいるか」
「……特に」
「向こうの情勢はどうなってる」
「……キトが落ちた」
「ほう？」と、ルティレイフィアは目を細める。さらに銅貨を三枚置く。店主はそれを静かに拾うと、続きを話し始めた。

グラントゥルモス帝国、フレグンス、ティルファ、キトの列強四国の和平会談にキトの代表として参加していたヨールテスがサムズの反乱に加担していた件で、他三国はキトに抗議文を出していたが、いずれも無視され続けていた。

商人国家キトは政府の実態が掴めず、交渉の窓口も分からない特殊な国。また帝国もフレグンスもティルファも、必要な物資の大半をキトとの交易に頼っているので、なかなか制裁処置に出られない。

しかしフレグンスの密偵がキトの中枢を探り出した事で、フレグンスは戦女神サクヤを大使としてキトに派遣。キト政府に対してヨールテスの身柄引き渡しや奴隷制廃止の受け入れ等を要求し、従わない場合は武力行使も辞さないと、最後通告を突きつけた。

キト側はそれらの要求を拒否。さらにはフレグンス大使一行への敵対行為に出たため、一行はキトの制圧に乗り出した。その制圧作戦には帝国やティルファも加勢したという。

「……帝国、フレグンス、ティルファの三国は、秘密裏に協力し合っていたようだ」

三国連合軍によるキトの街の制圧。事実上、キトの政府は解体されて三国共同統治となる。

これら一連の動きの裏には、戦女神の暗躍があったとも囁かれている――髭の店主はそう言って話を締めくくった。

「列強四国が三国になった訳か……。他に台頭する国が出てくれば四国のままだが」

そう言ってちらりと、奥の大男に視線を向けるルティレイフィア。男はその視線を受け流し、捻った干し肉を齧っては酒を喉に流し込む。

「族長が昼間から飲んだくれていて良いのか？」

「要らん世話だ」

先程の意趣返しをしたルティレイフィアは軽く笑うと、酒場を出るべく席を立とうとする。

そこへ新たな客が団体でやって来た。

この酒場の客達は、新顔の客に対しては警戒を示す。ルティレイフィアは色々な意味ですっかり馴染みの顔であるため目を付けられる事はないが、初めて訪れた者は傭兵、商人、一般人――滅多に居ないが――問わず、しっかり顔を覚えられる。

安物の武具で身を固めた傭兵団らしき集団。腕は立ちそうだが、魔物の多いこの地域でやって行けるような装備とは思えない。かといってそれが分からないような素人にも見えず、何とも言えないアンバランスさを纏った集団だった。

その集団のリーダーらしき男が酒場の中を一通り見渡す。何人か人相の悪い客がガン

を飛ばしてみるが、鋭く睨み返す男の眼光に格の違いを感じて、皆視線を外した。
やがて男はカウンターの前に立つルティレイフィアに視線を向けると、一瞬ピタリと動きを止める。そして真っすぐ彼女に向かって歩き出した。男の仲間もその後ろに続く。
客達はヒソヒソと「また紅獅子の揉め事か？」とか「今日は族長が居るから決闘は無いだろう」などと囁き合う。一方、族長と呼ばれた奥のテーブルの大男、『ブレブラバント・アッサム』は、何かあればすぐに動ける態勢を取りつつ成り行きを見守った。
「失礼。フレグンス第二王女、ルティレイフィア様とお見受けする」
「はて。わたしは此処では一介の傭兵に過ぎぬのでな」
ルティレイフィアは油断無く男を見つめながら、惚けたような言葉で肯定する。すると男は片膝を突いて騎士の礼を執り、背後の集団も一斉にそれに倣う。その動作にはフレグンス騎士団を彷彿とさせる統制感が滲んでいた。
「お初にお目に掛かります。当方、元サムズ駐在辺境騎士団クルストス支部アンバッス中隊所属、ヴィンス・フロッソと申します」
「サムズのクルストス支部……だと？」
サムズの動乱の折、クルストス支部では大勢の騎士が寝返ったと聞いた。朔耶の奇跡の力によって少なからず被害は抑えられたが、それでも五十名以上の騎士が討ち死にしたという。

ヒュッとかすかな風の音を立てて、ヴィンスの首筋に〝シュベルコーの剣〟が当てられた。
最高級クラスの証であるシュベルコーの銘が入った見事な刀身。
その輝きも然ることながら、いつ剣が抜かれたのか誰の目にも捉えられないほどの神速には、大族長ブレブラバントですら割って入る間も無かった。ブレブラバントは、紅獅子の実力に計り知れないモノを感じながら警告を発する。
「おい、街の中での揉め事は許さんぞ」
「……少し黙っていろブラバント、この男に訊かねばならない事がある」
「名を略すなっ、オレはブレブラバントだ！」
その抗議を無視して、ルティレイフィアはヴィンスと名乗った男に質問をぶつけた。
「元騎士と言ったな？　何故騎士を辞めたのだ」
「離反を致しました」
ピクリ、と頬をわずかに引きつらせたルティレイフィアは、ヴィンスの首筋に当てていた剣をスッと返し、弓を引き絞るように構えた。
ルティレイフィアの突きは竜の鱗を砕くほどの威力があるのだ。このまま一突きすれ

ば、ヴィンスを一瞬で葬る事が出来る。
「何故、わたしの前に現れた？」
「一つは償いのため。もう一つは借りを返すため」
「借り？」
「サクヤ殿に助けられ、自らの過ちを見せつけられました」
ヴィンスは騎士団を離反して放逐されてから、傭兵として自分の目で見てきた事を話した。
フレグンスの辺境騎士団に所属していても、ヴィンス達の気持ちは母国サムズにあった。和平会談の時期に合わせてサムズがフレグンスに反旗を翻した事は寝耳に水だったが、同僚の騎士の中にはその計画を知っていた者が数名いた。彼等から『我等が母国をオルドリアの列強国に』と誘われ、ヴィンス達は迷った末に反乱に加わった。
エバンスから辺境騎士団の本隊が逃げ込んで来た事も、決断の後押しになった。一気に人が増えた事でクルストス支部内は混乱し、密かに同志を募る事が容易になったのだ。
支部の参謀役になっていたアンバッス隊長には相談できなかったが、事を起こせば必ずこちら側に付いてくれると思っていた。だが、彼は自分達の決起を否定した。
仲間の半数を失いながらもアンバッス隊長と剣を交え、倒したと思った矢先、黒と白

の光の翼を広げた朔耶が神の使いのごとく現れ、あっさりと彼を蘇生させてしまった。
内心の動揺を抑えながら戦闘を続けようとしたものの、裁きの雷を受けて昏倒。目が覚めた時は全てが終わっていた。
懐に忍ばされていた路銀を手に、生き残った仲間と着の身着のままクルストスを脱出し、近くの集落に身を寄せるなどして、しばらくサムズの周辺を彷徨う内に、色々なモノを見聞きした。
「自らの偏狭さを思い知らされました……」
キトの奴隷商人と通じていたエバンスの孤児院の運営を正常化し、スラムの壊滅に貢献した事など、朔耶の活動とその功績についても語られる。
朔耶の働きかけによって見る見る活気づいていくサムズの街々を目の当たりにした彼等の話には、ルティレイフィアも知らなかった多くの情報が含まれていた。ちゃっかり酒場の主人も耳を傾けているが、そこは見逃す。
「我等一同、改めてフレグンスの騎士としての本懐を遂げるため、ルティレイフィア様の剣となりたく参上した次第であります」
ルティレイフィアは少し考え、剣を収めた。そしてヴィンスの口上に出て来た名前を思い起こす。

『アンバッス中隊所属――』
その騎士の名前には覚えがあった。朔耶を王都まで護送した騎士であり、朔耶からも信頼されていると姉の話に聞いている。
「お前達を鍛えたのは、アンバッスという騎士か？」
「ハッ、全員が隊長に鍛えられております」
「いいだろう。叩き上げの元騎士の力、見せてもらおう」
「ハッ、存分にお使い下さい」
こうして、ヴィンス傭兵騎士団はルティレイフィアの私兵として仕える事になったのだった。

キトが制圧されてから七日目、王都フレグンスの一般区に〝銀月の牙〟ことパーシバル傭兵団の馬車が到着した。
王都の衛兵達には、朔耶の滞在中に彼等が訪ねて来た場合は工房へ案内するよう、あらかじめ話が通されていたので、傭兵達は衛兵に案内されて開放区にある朔耶の工房までやって来た。
「ブラット団長、ツヅキはここに住んでるんですかねー？」

「サクヤ部隊の本部とか」
「そんな訳はないだろう。しかし、サクヤ式か……やはりサクヤ部隊とサクヤ式には、何か関連があったのか？」
工房にいた朔耶は、衛兵からパーシバル傭兵団の来訪を告げられると、作業の手を止めて彼等を迎えに外へ出た。
「やほーブラットさん、元気だった？」
「それなりにな。……ここは、サクヤ式の工房か？」
「うん、今ランプの部品作ってたとこ。報酬の残りはすぐ用意するから、中でお茶でもどうぞ～」
朔耶は今日も朝からこちら（オルドリア）へ転移して来て、一人で工房に籠（こ）もっていた。工房はそれなりに広く、ゴツイのが二十人ほど入っても手狭になる事は無い。二十人分のお茶を用意した朔耶はそのまま工房でブラット達を待たせ、報酬の金貨を受け取りに城まで飛んだ。
「おっはよーレイス。ブラットさん達が来たから、例の報酬の金貨、ちょうだい」
キト制圧前、現地を探るため単独潜入していた朔耶は、闇市通りで偶然再会したブラット達に極秘調査の協力を求め、金貨三百枚で請け負ってもらった。彼等の働きによ

り、調査はかなりスムーズに運んだのだ。
「ああ……おはようございます。例の彼等ですか……ええーと、フレイ」
「はい。どうぞサクヤ様、重いですよ？」
「うおっ重！　……それはそうと、なんかレイス疲れてない？」
金貨の詰まったズッシリと重い袋を、どっこらせーと気合いで担（かつ）いだ朔耶は、レイスからお疲れ気味な雰囲気を感じ取って訊ねた。
キトの統治に派遣する官僚等の選定や、未開地鉱山の調査に同行させる人材の手配など、ここ最近は仕事に忙殺されているらしい。心なしか頬が痩（こ）けているように見える。
フレイはとても元気だったが。
「フレイはなんかテカテカしてるね」
「はいっ、サクヤ様の湯浴み道具、洗髪液や湯浴み用洗剤のおかげです！」
サラサラの赤毛に艶々（つやつや）の肌。満ち足りた表情のフレイ。
何か察しなくてはいけない気がした朔耶は、それじゃあまたねとレイスの執務室を後にした。今度、父の栄養剤でも差し入れてあげようかなどと考える朔耶だった。
「おっまたせー。残りの報酬、金貨二百枚でーす」

おおー、と団員達がテーブルの上にどすんと置かれた金貨の袋に寄って来た。わいわいと金貨の手触りを愉しむ彼らを横目に、朔耶は肩と首を回しながら作業台に戻り、放置してある作りかけの部品を一旦仕上げる。それを見ていたブラットが声をかけた。

「そいつは、魔力石の加工品か？」

「そうだよー？」

「もしかして、サクヤ式ってのはお前達が作ってたのか」

「うん？　あたし達っていうか、あたしが作ったのがほとんどかなー」

元々コッチの活動がメインだという朔耶に、ブラットは怪訝な表情を浮かべて考え込んだ。

更新されたブラットの認識によれば、朔耶は――『フレグンスの特殊精鋭精霊術部隊サクヤのメンバーで素人のエリート学生、名はツヅキ、王室所縁の身でありながら自身の持つ特異能力故に、危険な任務を単独で任されるサクヤ式の考案者』となる。

さすがに色々と無理が出て来た人物像に、ブラットは聞いても無駄と思いつつ、朔耶に対し自分の把握している人物像を語って確かめた。

一瞬の揺らぎも見逃さないよう、その黒い瞳をじっと見つめながら。

朔耶は爆笑した。

テーブルに突っ伏し、自らの長きにわたる勘違いにヘコんでいるブラットを余所に、朔耶は団員達から未開地についての話を聞き出していた。

未開地アーサリムには、他の地域ではほとんど見かける事の無くなった魔物が今も多く出没する。

アーサリムの入り口となる街、『ササ』の近辺に現れる事は滅多に無いが、同地方の中部に広がる『ポルモーン渓谷』などは、人狩りが放った魔物や野良魔獣が徘徊する危険地帯だ。

そのポルモーン渓谷には、規模の小さい街を中心にいくつか村も点在している。危険な地域にもかかわらずそこに住む人々は、先祖代々暮らしてきた土地を離れようとはしない。

ちなみに、『魔獣』とは普通の動物が何らかの原因によって怪物のごとく変貌したモノで、たまに大人しいモノもいるが、大抵は凶暴だ。

『魔物』は元から怪物として生まれたとしか思えないような、獣などとは似ても似つかない異形の生物を指す。中には魔術を使う個体も確認されており、知性を持つ分、魔獣より厄介な存在だ。

人狩り達はどうやってか、この魔物や魔獣を手懐けており、猟犬のように使っている。
魔物や魔獣を討伐すると稀に『魔力の結晶』が拾えるので、腕に覚えのある者が一攫千金を狙って未開地まで赴いたりする事もあるらしい。
「魔力の結晶？」
「ああ、希少性なら精霊石とどっこいの、高値で売れる石さ」
聞き慣れない言葉に朔耶が訊き直すと、団員の一人がそう教えてくれた。
どのような過程で魔物の体内に精製されるのかは分かっていないが、純粋な魔力の塊なので魔術の触媒として非常に有用で、かなりの高値ながらもすぐに買い手が付く。
同じ魔力の籠もった石でも、ポピュラーな魔力石は元々その辺に転がっている自然石が様々な要因を受けて、空中を漂う魔力を蓄積する入れ物と化したものである。
魔力の溜まり方からして不規則なので、石から放出される魔力にしろ、石の内部を巡る魔力にしろ、その流れ方にムラがあるのだ。そのため、魔力に特定の流れを与える事で諸現象を起こす魔術において触媒にしようとしても、魔力の流れが乱れやすい。
「その点、魔力の結晶は魔力の流れが綺麗に整ってる上に、含まれる魔力量も多いのさ」
「へ～」
ただしその魔力の結晶を得ようとしても、魔物の討伐には相当な危険を伴う上に、苦

労して討伐したところで必ずしも手に入るとは限らない。安全を考慮して大所帯で行けば確実に赤字。少数精鋭でも儲かるかどうか微妙なので、アーサリム地方は傭兵団にもあまり人気が無い。
「ふーん。それじゃあ、結晶狙いで魔物の討伐とかやってる人達って……」
「ああいう連中は、それこそ化け物みたいな奴等だよ」
「まあ、ツヅキほどじゃないけどな」
「ちょっ！　なにソレ、失敬な！」
工房内に笑い声が響く。団員達とそんな話を続けながら朔耶は、近く列強三国から未開地へ部隊を派遣する動きがあると前置きし、少し突っ込んだ質問を投げかけた。
ポルモーン渓谷よりさらに奥には何があるのかという事についてだ。
「ポルモーンより奥になると、スンカ山の麓にアーレクラワって街があるな」
「あの辺りは特にやべぇ。スンカ山は魔物と魔獣の巣窟だからな」
「ああ、あの街もよく持ちこたえてるもんだよ」
ポルモーン渓谷を抜けた先には『スンカ山』という大きな山があり、その麓には『アーレクラワ』という街がある。だが、その一帯はスンカ山から湧いてくる魔物や魔獣が跋扈しており、危険度はポルモーン渓谷の比ではないそうだ。

スンカ山とは、まさしくキトの地下施設の書類に記されていた精霊石鉱山である。朔耶は鉱山の事は伏せつつ、アーレクラワの街とスンカ山についてもう少し詳しく聞き出そうとしたが、復活したブラットが待ったを掛ける。

「情報は俺達にとっても商売道具だからな。これ以上はタダで教える訳にはいかないぞ？」

「ぶー、ブラットさんのケチー」

「団長のケチー」

「おいコラっ、お前ら懐柔されてんじゃない！　むざむざ飯の種を棄てる奴があるか」

どうやら団員達は、破格の報酬を得た事で随分と口が軽くなっているようだった。

「ったく……、これもツヅキの能力なのか？」

「なによそれ？」

結局、それ以上目ぼしい情報は引き出せなかったので一旦諦め、朔耶もキト制圧の話を聞かせたりして適当な時間を過ごした。

その後、パーシバル傭兵団は一般区で宿を取ると言って朔耶の工房を後にした。

ブラット達を見送った朔耶は、彼等から得た情報を昼食がてら知らせに行こうと城に向かう。今日の昼食は、レティレスティアにお呼ばれしているのだ。

いつものように城のテラスの窓から廊下に入ったところで、アルサレナと鉢合わせした。

「あ、アルサレナさん」

「まあサクヤ。窓から出入りするなんて……フフッ」

てっきり『はしたない』などと叱られるかと思い身構えていた朔耶は、『フフッ……ってなにー！』と逆にうろたえた。

「私も昔よくやっていたのですよ。もっとも、一階か二階の窓からですが」

「さいですか……」

ちょうどいいやと朔耶は、アルサレナにも未開地アーサリムについて得た情報を報告する。彼の地についてはアルサレナもルティレイフィアが帰国した折によく話を聞いていたので、ポルモーン渓谷やその奥の危険地帯の事は知っていた。

「精霊石の鉱山であるスンカ山の攻略は、アーレクラワに兵を置く事が前提になりますね」

「でも魔物の巣窟って言ってましたよ？　採掘なんて出来るのかなぁ」

アルサレナは魔族組織の本拠地がスンカ山付近だという事から、何か魔物を手懐ける

手段があり、組織の者達はそれを使って魔物を退けているのだろうと推測していた。さらに、魔族組織はキトにおける商売全般や税収のみならず、鉱山から採れる精霊石をも大きな資金源にしていると見ている。

「人狩りの組織が魔物を使っているという事は、彼等もまた魔物を使役するような方法を知っているのでしょう」

「……それって、人狩り組織も闇業者と同じで、魔族組織と深い繋がりがあるって事ですよね？」

アーサリムから攫われて来た人々は、キトの闇市で闇業者によって売られていた。闇業者のバックには、キトの政府として君臨していた闇ギルドの存在。その正体は、アーサリムに本拠を構える魔族組織だった。

魔族組織は魔物の徘徊する地域で活動しており、人狩りは魔物を使役している。

「むしろ、人狩りと闇業者は、魔族組織の一部と考えた方が自然ですね」

「確かに……」

いずれにしてもアーサリムに兵を送るならば、魔物対策として相応の装備や、慣れない土地を案内する人材も必要になるとアルサレナは溜め息を吐いた。優秀な騎士や必要な装備はすぐにでも揃える事が出来るが、案内人については交流の無い未開地だけになかなか難しい。

ルティレイフィアを呼び戻して案内をさせながら、派遣する騎士団の指揮を執らせようという案も挙がっているという。しかし、娘は簡単には応じないだろうとアルサレナは語った。

「もしかして、ルティって頑固者？」

「ええ、頑固ですとも。そもそもあの子が未開地を飛び回っているのは、私やゼルへの当て付けのようなモノですからね」

普段は身内の前でしか口にしない、夫カイゼル王の愛称などをポロッと零しながら、アルサレナは愚痴気味に嘆く。それを聞いて『ゼルさんって呼んでるのか～』とさり気無くチェックする朔耶。

『父上母上が王国を維持するために動けぬと言うなら、わたしが王族たる在り方を知らしめるべく、民のために剣を振るいましょう』

王都内を犯罪組織に食い荒らされながらも、国内の安定のため積極的な対策を打てぬ両親にそう言い放って王都を飛び出したルティレイフィアは、お忍びで領内各地を旅しては彼方此方で盗賊団などを潰して回っていた。

ある時彼女は、領内を横断中だった犯罪集団から、人狩りに攫われて売られて来たと

いう奴隷達を救い出した。そして彼等を故郷へ送り届けるべく未開地へ踏み入った際、その地に住む人々の窮状を知り、少しでも彼等に安全な暮らしをと奮闘し始めて今に至っている。

何度かルティレイフィアから、アーサリムをフレグンス領に組み入れるよう提案された事もあったが、得るモノも無く、出資が増えるだけだとの理由で聞き入れられる事は無かった。

クリューゲルやサムズに派遣している騎士団の運営や、街道の整備などにも結構な資金が掛かっているのに、この上アーサリムのような未開地を抱える事など出来ないと。

ルティレイフィアもそこには理解を示していたが、納得はしていない様子だったという。今更、鉱山が見つかったから領土に組み入れるために指揮を執れと言われて素直に頷く娘ではないと、母親は溜め息を吐いた。

「他にも理由はあるのですけどね。まったく、あの子の身勝手な行動はジャバールの次男に唆されたモノと思っていますよ」

「あははは……」

朔耶は以前ルティレイフィアから聞いた話を思い出す。

その昔、一人で城を抜け出して下街へとやって来たルティレイフィアが、王都に巣食う犯罪組織に攫われるという事件があった。その組織は一部の上流貴族達の暗黙の了解や上司の命令を無視して動いていた一人の騎士の存在があった。彼は、ルティレイフィアが一人で城を抜け出せるよう手引きして囮に使うというなかなかに物騒な手段を使ったのだ。

それが、現在カースティアの派遣騎士団で小隊長を務めるジャバール家の次男、ガリウス・ツィット・ジャバールである。ちなみに、囮にされたにもかかわらずルティレイフィアのガリウスに対する評価は「強い男だ」であったから、唆されてはいなくとも影響を受けているのは間違いない。

アルサレナの愚痴に付き合っていた朔耶は、不意の閃きにポムッと手を叩く。腕のいい案内役に心当たりがある事に気づいたのだ。それも今、物凄く身近な場所に居る。朔耶はアルサレナに、彼等の事を話した。

「精鋭の傭兵団、ですか」

「うん、信頼できる人達ですよ。団長はエロイ人だけど」

本人が聞けば両手と膝を突いて項垂れそうな紹介をする朔耶だった。

その頃、話題になっていた件の姫君は――

「まずは、お前たちの装備からどうにかしなくてはならんな」

「申し訳ありません……」

ササの街の露天商が集まる広場にて、一つに結んだ赤み掛かった金髪を頭の後ろで揺らして颯爽と歩く美貌の傭兵剣士、別名『紅獅子』。そしてその後ろを若干覇気の無い様子で俯き加減にゾロゾロと付いて歩く体格の良い男達が八人。

ルティレイフィアの配下となったヴィンス達だったが、装備の貧弱さも含む諸問題によりポルモーン渓谷方面まではとても連れて行けないと判断され、武具を整えるためにこうしてやって来たのだ。

ここ数日、ササの街周辺を巡って魔獣との戦闘を経験したヴィンス達は、その苛烈さに疲弊しており、装備も既にボロボロで破棄寸前という有り様である。その上仕えるべき主に面倒を掛けてばかりという醜態に、ちょっと落ち込み気味でもあった。

そんな男達にルティレイフィアは、馬車を改造した簡易店舗の武具屋で、キャリゴル以下だがそれなりに良いモノを一人当たり数点揃えさせる。

キャリゴルとは、オルドリアの三大名工の手による武具の中では一番下になる星三つクラスのモノである。三大とつくだけあって過酷な環境でも壊れにくく長持ちするため信頼性は高い。

剣にせよ鎧にせよ、武具の消耗が激しいこの地ではせめてそのぐらいのものが欲しいところだが、販売経路も整っていないこの地方ではそれも叶わない。やむなくキャリゴル以下を使うなら、良い物でも予備を含めて最低三セットは必要になる。

装備一式を三セット、それも八人分となれば、武具屋にとっては在庫も捌いての大儲けになる。

だが、武具屋の店主はこの辺境も辺境である未開地の街でそれほどの資金を持ち歩けるような者が居るのか、と懐疑的な視線を客人集団に向けた。

「うん？　代金の心配をしているのか？　それなら心配するな」

ルティレイフィアは商人のこういった対応にも慣れたモノで、懐の袋から一粒の鉱石を取り出して見せる。

「それは……っ、魔力の結晶！」

「これを代金として渡そう。換金はそちらでやってもらえるか？　十分な値段になると思うが」

「も、もちろんでさぁ！　ウチの一番マシな武具を全部出してもお釣りが来るってモン

ですぜっ」

希少な鉱石に目の色を変えた武具屋の店主は、馬車の奥に仕舞ってあった商品を片っ端からカウンターに並べていく。ヴィンス達はそれを受け取って装備を整え、予備の分はオマケで付けてくれたベルト付きの旅袋に入れて担ぐ事にした。

「しかし、よろしかったのですか？　あのような高価な物を」

「魔力の結晶の事か？　アレならまだ幾つか手元にあるからな、気にするな」

ルティレイフィアの返答に驚くヴィンス。魔力の結晶は魔物や魔獣を討伐すれば採取できるという事は知っている。だが一つ手に入れるだけでも相当数の討伐をこなさなくてはならないはずだ。にもかかわらず彼女はそれをまだ幾つも持っていると言う。

ヴィンス達の表情からその胸の内を読み取ったルティレイフィアは、少し呆れつつも笑みを見せた。

「お前たち、わたしを侮っているな？　これでも単独でアーサリムを旅して来た身だぞ？」

ルティレイフィアが兵を募るのはアーレクラワまで遠征する時や、ポルモーン渓谷に点在する村々を警備する時がほとんどで、自身の護衛として雇う事は滅多にない。大抵

は一人で行動している。

ルティレイフィアはそれだけの実力を備えているし、彼女自身も一人の方が動きやすいと思っていた。

「わたしの剣になりたいのなら、その程度の実力は身につけてもらうぞ」

「ハッ、精進いたします！」

ヴィンス達を引き連れて今夜の宿を取るべく街の中心部に来たルティレイフィアは、そこでブレブラバントの率いる街の巡回兵と鉢合わせした。あからさまに嫌な顔をするブレブラバントをヴィンスが睨み付けた事で、双方の間に不穏な空気が漂う。

「意外に血の気の多い奴だな。わたし達の敵は彼等ではないぞ？」

「ハッ……申し訳ありません」

苦笑しながら諭すルティレイフィアに、恐縮するヴィンス。そのやり取りを見たブレブラバントが鼻で笑った。

「ふっ、随分と青いのを連れているな。紅獅子の国は人手不足なのか？」

「お前も族長の自覚があるなら、無闇に人を挑発するモノではないぞ？　ブラ」

「名を略すな！　オレはブレブラバントだっ！　つか、ブラってなんだ！　変な略し方

するな！」

彼等の部族では名がその者を表し、バランス良く長く、難しい名前ほど立派であるとされている。長くて難しい名前を正しく呼ばれれば、それがそのまま尊称となり、名前が略されるのは半人前扱いに相当するのだ。

ちなみにルティレイフィアはその事を分かっていて略している。ブレブラバントの実父であった今は亡き前族長の、凄まじい蛮族戦士ぶりを知る彼女からすれば、息子のブレブラバントは、図体はともかくその中身はまだまだ未熟に見えるのだった。

肩を怒らせてノシノシ巡回路を歩いて行く若き族長の後を、部族衣装であるカラフルな戦衣を纏った巡回兵が笑いを堪え肩を震わせながら付いて行く。それを見送ったルティレイフィアはヴィンス達に向き直ると、真面目な表情になって忠告した。

「いいか、ここは彼等の『国』だ。それを忘れるな」

ササ自体は小さな街ではあるが、街周辺には特定の部族ごとに集まった集落が幾つも存在する。それらの部族を一つに纏め上げているのが、ブレブラバントを族長とするブブ族である。

「わたし達から見れば蛮族でも、彼等はこの土地を治める、謂わば王族のような立場にある。それなりの敬意は持て」

未開地を知らないヴィンス達に対し、少しずつこちらの常識について教育していくルティレイフィア。

彼女はアーサリムの人々にササのような安定した街をポルモーンやその先のアーレクラワにも築かせ、いずれはこの地方に祖国と同等、すなわち列強国並みの大国を興させようと目論んでいた。

かつては、フレグンスの領土に組み込む事でこの地方の安定を図ろうと父王達に提案した事もあったが、アーサリムに住む人々を知るに従い『ここは彼等の土地である』との認識を深め、彼らが力を合わせて国家を運営する事を望むようになっていたのだ。

そんなルティレイフィアのもとに、王都からアーサリムへ向けての部隊派遣の報が届いたのは、この日から五日後の事だった。

第二章　アーサリムの部族会議

放課後、冬休みを前に浮き立つクラスメイト達の姿をボンヤリと眺めていた朔耶は、友人である藍香と実穂に声をかけられて振り向いた。

「朔ちゃん、冬休みの予定どうする？」
「冬休みかー……」
パーシバル傭兵団が王都に訪ねて来た翌日も、朔耶は工房で部品作りに勤しみ、城でレティレスティアと昼食を共にし、キトの統治と精霊石鉱山の事で忙しい官僚達を尻目に静かな時間を過ごした。そしてこちらの世界に戻って来た今、改めて未開地の事を考えていた。
朔耶は先日、オルドリアの二つの列強国において奴隷制廃止と人身売買の禁止政策の発令を実現させた。その事がキトの制圧作戦、さらにはアーサリムへの部隊派遣という事態にまで発展した事を、割と重く受け止めているのだ。事の切っ掛けが自分にあるだけに、この平和な時間の中でもクラスメイト達のように浮かれた気分にはなれない。
「もう来週末には休みに入るしさ、今からどこに行くか決めとかないと！」
「どこか行くのは決定事項かいっ……んー、でもあたし用事があるかも」
「朔耶ちゃん……例のアレ？」
この前の昼休みの事を思い起こしながら控えめに問う実穂に、朔耶は頷いてみせた。

それはキトの制圧作戦について詳細が詰められていた頃。

朔耶は学校が終わるとオルドリア大陸へ転移して極秘会議の状況を確認していた。キト側にこちらの動きを悟られないよう、本当に信頼できる者だけで対キト政策が練り上げられていたのだ。
そんなある日、昼休みの教室にて。
「朔耶ちゃん、最近わたし達に何か隠してない？」
「えっ！」
いつものように三人でお弁当を突き合っていたところ、実穂から唐突にそんな言葉を投げかけられて、朔耶は驚く。
「朔ちゃ～ん、その反応はイエス・サーだよ？」
「いや、サーは無いと思うけど……」
「……やっぱり、わたし達には言えない事？」
「え、え～～と……」
珍しく口籠もる朔耶に、実穂と藍香は心配そうな表情を向けた。朔耶も向こうの世界の事であるだけに、どう説明したモノかと困った表情を返す。
レティレスティアとイーリスの仲を取り持ちたいというような内容なら、「友達の話だけど――」で始めて身分の違いや仕事の忙しさなどを現代風に変換しつつ、割と簡単

にごく普通の恋愛相談として話が出来る。
しかし、キト制圧作戦の進行具合というような事になると、なかなかそんな風には変換できない。ましてや一介の女子高生が悩みそうな内容になど。
「うーーん、なんて言ったら良いんだろう？」
「それって凄く言いにくい事？」
「まさか……！　とうとう朔ちゃんにも誰か気になる男とか出来て、でも今までそんな経験無かったからどうしたらいいか分か……もぐもぐ」
いつもの発作を起こした藍香の口にカニカマボコを突っ込んで黙らせた実穂は、声を潜めながら確認するように一言。
「オルドリアの事？」
「っ！」
なんで!?　という表情で固まる朔耶に、実穂はまず、決して詳しい内容を知っている訳ではないと断りを入れる。
『オルドリア』が何を指すのか、特定の場所なのか、それとも団体や組織なのか、誰か個人を指すのか、実穂は全く知らない。ただ、独自に朔耶の事を調べていた彼女が、朔耶に近しい人物の会話をたまたま耳にした際に出てきた固有名詞だったのだ。

「ごめんね。わたし、どうしても最近の朔耶ちゃんの事が気になって」
実穂は朔耶に対し、周辺を嗅ぎ回るような真似をした事について謝った。そして困った顔をしている朔耶に、どうしても自分達が立ち入ってはイケナイ事なのかと問う。
「ううーん……イケナイというか何というか……、実穂と藍との間にある一般人としての日常を壊したくないというか」
「え、なにソレ！　朔ちゃん裏の住人になっちゃったの？　マジで、それってどんな、え？　でもちょっとヤバくない？　イヤでも最近の朔ちゃ……もぐもぐ」
藍香の二度目の発作を一口ハンバーグで鎮めた実穂は、それじゃあ一つだけと人差し指を立てる。こういう可愛い系のポーズは、一見ボヤッとしている実穂がやると本当に似合うなぁなどと思いつつ、朔耶は頷いた。
「朔耶ちゃん、またわたし達の前から急に居なくなったりしない？」
ある日突然、朔耶が消えてしまったのが半年前。約束のキャンプ場で待てど暮らせど現れず。連絡も付かず、街に下りて朔耶の家に電話を入れて、そのまま週末が過ぎ、平常通りに学校が始まっても朔耶は姿を見せなかった。
その後、失踪事件として大捜索が行われ、夏に入り、何の手がかりも得られないまま捜索の打ち切りと捜査体制の縮小が告げられ。そして居なくなった時と同様、ある日突

然、帰って来た。

朔耶の失踪中、実穂と藍香は二人で居る事が多かったが、遊びに行く事は一度も無かった。特に藍香は、自分がキャンプに誘った事が原因かと一時期酷く落ち込み、そんな藍香を実穂が支えている、という状態だったのだ。

「……そっかぁ。二人にも随分心配かけてたんだよね。ごめんね？　藍」

「えっ！　いや、あたしはホラッ、朔ちゃんが無事なら無問題（モウマンタイ）だし！」

ぶんぶんと両手を振って顔を赤らめる藍香は、実穂に話題の転換を図れと合図を送るも、軽く流された。

「んー、確かに二人に隠してる事はあるけど……いつか教えられる時期が来たら教えてあげる」

最近の朔耶が時折見せる、深みのある、落ち着いた笑み。そんな表情を二人に向けながら朔耶は続ける。

「もう勝手に居なくなったりはしないから、そこは安心して？」

「朔ちゃんっ！」

「朔耶ちゃん……」

瞳を潤ませた実穂と藍香は、分かったと頷いた。

昼休みの教室で机を寄せてお弁当を広げながら、何故か手を取り合い見つめ合っている朔耶達に、クラスメイトは微妙～な視線を送っていたという。

――そんなやりとりを交わしたのが、約一週間ほど前。

詳細は話せないが、朔耶はその『オルドリア』の事で少々問題が発生しているのだと伝える。

「まあ、あたしが悩んでどうこうなる問題でもないんだけどねー」

「朔ちゃん、相談できるところまではあたし等にも相談してよ？」

「わたし達は朔耶ちゃんの味方だからね？」

「藍……、実穂……。うん、ありがと」

教室の端で、いつぞやのように手を重ね合い見つめ合う朔耶達。

今回はクリスマス前で浮き立っているクラスメイト達も似たような事をやっていたので、特に注目を浴びる事はなかった。

地球世界（こちら）の人間でオルドリアについて話し合える兄の重雄（しげお）と弟の孝文（たかふみ）、それに幼馴染（おさななじみ）の拓朗（たくろう）。朔耶のブレーンとも言える三人に現在の問題について相談した朔耶は、皆から

揃って「お前が気にする事じゃない」と言われた。
朔耶は自分の権限の範囲で動き、それでたまたま見つかったモノの中に鉱山の情報があったというだけの話。たとえそれで三国が揉めたとしても、それはあくまで三国の問題なのだ、と。
「その魔族の本拠地ってのが見つかってなきゃ、もっとひどい事になってたかもしれないんだろ？」
「鉱山の権利を手に入れる決定を下したのは各国のトップだからな。国ってのは利益を求めて揉めるモンなんだよ」
「朔耶が動いた事でキトと魔族との関係が明るみになった訳だ。むしろ良い方向に進んでるとも言えるんじゃないか？」
「そうなのかなぁ」
満場一致で「気にするな」と励ます三人の気持ちを受け入れ、朔耶は気持ちを切り替える事にした。
「まあ、俺が前に言った『お前は人々を導く女神にもなれれば、世界を破滅させる悪魔にもなれる』ってのが頭に残ってたから、そこまで気に病んだのかもな」
「なんだ、お兄ちゃんのせいか」

「ちょっ！　切り替え早っ」
都築家の居間のコタツで、向かい合ってミカンを食べながらオルドリアの今後について話し合う朔耶達。未開地の魔物について話が及ぶと、拓朗が「ついに武器を開発する時が来た！」と拳を振り上げる。コタツに入ったままで。
元ミリオタの拓朗は、以前現代兵器の概念を取り入れたサクヤ式の武器の製作を提案して、朔耶と孝文に却下された事がある。
「武器ねぇ」
「要は、特定の人間にしか使えないシステムにすれば良いんだよ」
武器の動力部分を分離し、支給制にして武器だけ手に入れても使えない仕様にする。その上で動力部分を特定の集団にのみ持たせるようにすれば、武器の拡散や犯罪利用は防げるはずだと拓朗は主張した。
実は以前から『武器開発の解禁』を狙って考えていた理屈である。軍隊仕様の大量破壊を目的とした『兵器』ではなく、個人仕様の『武器』と規模を小さくしているところに自重の形跡が見られた。いずれにせよその道具の運用は軍に任せる事になるのだから、実質的な差異の無い、建前的な配慮だが。
「『精鋭』で通るプロの傭兵がヤバイって言うくらい危ない地域なんだろ？」

「防具より武器の方が作りやすいからなぁ。味方の生存率を上げるって意味でならいいかもな」

今回は孝文も拓朗の意見に肯定的だった。本当は危険な事には関わるなと言いたかったが、どうせ聞きゃしないのだからと、少しでも安全を図れるようにと考えての事だ。朔耶の周囲の人間を護る事で、朔耶が傷つかないようにするという打算もある。

「でも、どんなモノ作る気なの？」

「最初は銃にしようと思ってたんだけど、向こうの人間がちゃんと使える武器で、生産性とか使用制限を考えるなら近接武器の方がいいかなって」

朔耶からキト制圧の話を聞いた拓朗は、攻撃の要であり、援護にも回る事の出来る魔術士の数の少なさとその能力の高さを考慮して、武器の概要を導き出した。

魔術士達を護る壁役となる前衛の騎士や傭兵に、魔術にも引けをとらない攻撃力を持たせる。前衛が即座に対処できれば、不意に始まる遭遇戦が主体となるであろうアーサリムでの進撃にも有利に働く。

となると、小回りが利いて、混乱した状況でも同士討ちなどの事故が起こりにくいモノが望ましい。以前拓朗が考案していた魔力石コイルガンは、本体から圧縮反発力によって発射された弾丸を、砲身部分に並べた反発力ユニットでさらに加速させるという多重

圧縮反発力式の射出機だった。構造上どうしても大型になるので、持ち運びも使い勝手も悪い。

なので今回は飛び道具は諦め、圧縮反発力を使った殴り系の武器にするという。

「ＥＢは当てっ放しにしてれば角材が切れるぐらいの威力はあるけど、あれで斬りつけても瞬間的な威力はせいぜい市販のスタンガン程度しか無い。だからあれは見た目での牽制や鎮圧用に使うとして、前に朔耶が作ったって言う篭手を参考にしようと思う」

圧縮反発力による衝撃波を撃ち出し、対象を吹っ飛ばす篭手。あれならば、朔耶から譲り受けた騎士が改良の加えられたモノをサムズ動乱の折に使って成果を上げている。加えて帝国のガルブレック密偵隊長も元皇帝側近と対峙した際に使用しており、新しい武器でありながら信頼性が高い。

拓朗曰く、朔耶が作ったそのままの仕様ではなく、もう少し武器としての威力を上げるべく工夫を凝らすつもりらしい。

「『アンバッスさんの拳骨』かぁ」

そのネーミングはどうなんだ？　と、居間が微妙な沈黙に包まれた。空気を変えるように重雄が話題を振る。

「そういや最近、親父も工場の仕事が終わった後で何かやってるな」

「ああ、なんか得体の知れないモノ作ってるみたいだ」
「お父さんが？　へぇ～」
「小父さん、なに作ってるんだろうな？」
居間のコタツ会議は籠のミカンが無くなるまで続くのだった。

「来週から冬休みか……」
すっかり冷え込むようになったこの時期。
薄暗い早朝、霜が降りる庭に出た朔耶は、とりあえず王都を目指して転移した。孝文と拓朗による武器の開発はまだ始まったばかりなので、今日持っていくのはレイスへのお土産のみだ。
王都からアーサリムへ向けて王国騎士団が派遣されて二日目。工房にやって来た朔耶は、衛兵から「ティルファより屋形船完成の報が届いている」と聞いて城に急いだ。
一応ほぼ確定した婚約者同士であるレティレスティアと近衛騎士団長イーリス。なかなか進展しない二人の仲を後押しするべく、朔耶が立案した極秘作戦『愛の屋形船作戦』の舞台となるのがこの屋形船だ。
今日はその屋形船用の備品を持って、先日朔耶から事業を引き継いだ若い官僚と共に、

立ち読みサンプルはここまで

ティルファへ船の引き取りに向かおうと考えていたのだが――
「え、使えない？」
「はい、アーサリムに兵と物資を運ぶので、しばらくは……」
城で朔耶を迎えた若い官僚は申し訳なさそうに告げる。
今現在、二頭立ての竜籠一台が先発隊を乗せ、サムズ経由でアーサリムに向かっている。残りの四頭の飛竜もこれから二頭立て竜籠での物資と兵の輸送にフル稼働する事になるため、カースティアへの屋形船運搬は事態が落ち着くまで延期になった。
遠方への部隊派遣で、城中がピリピリした緊張感と忙しない空気に包まれている。
「そっかぁ……それじゃあ仕方ないよね」
若い官僚を労った朔耶は、単独でティルファに飛んでしばらく船を運べない旨をドマックに伝えに行く事にした。
「……その前にレイスにコレだけ渡して行こっと」
宮廷魔術士長の執務室にやって来た朔耶は、扉をノックしてノックして、もう一度ノックして待つことしばし。こそっと顔を出したフレイが入室を促してから執務室に入った。
何となくフレイから拗ねたような気配を感じるが、朔耶は気にしない。
「おはよーレイス」